

ボランティア OSAKA

創刊号

'95 / SPRING

特集

誰でも、何かはできる。
阪神・淡路大震災で活躍したボランティアたち



●発行●

(福)大阪府社会福祉協議会
大阪府ボランティアセンター

創刊のごあいさつ

大阪府社会福祉協議会では、これまでもボランティア活動振興事業を行い、取り組みについてはその都度機関紙「福祉おおさか」等に掲載してきましたが、平成6年度から、新たに「都道府県ボランティアセンター活動事業」に取り組み、その一環としてボランティア情報誌『ボランティアおおさか』を発行することになりました。

創刊号は、折しもすべての国民を震撼させた「阪神・淡路大震災」救援活動に大きな役割を果たした「震災救援ボランティア」活動の特集しました。特集では本会が率先して取り組み、設置された全国の福祉関係者の救援対策本部、および西宮市に設置した現地事務所の活動を中心に紹介。やむにやまれぬ気持ちで全国から集まったボランティアや、社協・施設職員などの活躍ぶりから、読者の皆さんがあらためてボランティアの意味、その社会的役割について思いをめぐらせていただければ幸いです。

次号からも、そのときどきのボランティアに関わる情報をお届けする予定です。今後とも『ボランティアおおさか』をよろしくお願い申し上げます。

大阪府社会福祉協議会
大阪府ボランティアセンター

表紙の人

平田あやさん(20)

上智大学法学部2年生
鎌倉市在住。

「今回の震災は、叔父や従兄弟が芦屋に住んでいたこともあり、とても人ごととは思えませんでした」。2月に西宮で日帰りボランティアを経験し、3月6日から1週間は泊まり込みで、社会福祉関係者救援合同対策本部の西宮現地事務所で、受け付け、連絡係などを担当した。

「かわいそう...という言葉は好きじゃない。被災を、自分の胸の痛みとして捉えてこそ、初めて被災者を理解できると思っています」。中学・高校もミッションスクール。生活半径の中にボランティアは日常的にあった。「でも、何となく近寄り難く、飛び込む勇氣もなくて本格的にやったことはなかったんです」。しかし今回の経験で「あらためて、ボランティアは民主主義の実現のためには欠かせないものであることを痛感しました」。マジョリティの原則は、ときに弱者やマイノリティに目が行き届かないことがある。それを補うのが自発性に基づいた民間のボランティア活動...というわけだ。

多くの日帰りボランティアに対応するコーディネートターの役割を担った1週間。「鎌倉の両親には、カタチのないお土産をたくさん持って帰れるような気がします」。

特集

誰でも、何かはできる。 阪神・淡路大震災で活躍したボランティアたち



1月17日、5時46分。淡路島を震源地にした震度7の激震が淡路島や阪神間の都市部を襲った。亡くなった方は5500人近くに達し、倒壊家屋も10万棟を超えるという多大な被害をもたらした。

震災の直後から、学生や主婦、会社員など、年齢や職業もさまざまなボランティアが全国から続々と集まり、救援活動を買って来たが、大阪府社会福祉協議会（府社協）でも、被災した人々に対する救援活動をいち早くスタート。府社協内に社会福祉関係者救援合同対策本部を設置し、西宮市に現地事務所を開設。ここを拠点に、全国の社協の全面的な参加を得て、多彩なボランティア活動を展開してきた。その他、さまざまな市民団体、企業、労組も積極的な支援を行った。なお救援合同対策本部および現地事務所の活動は3月15日で終了したが、引きつづき、兵庫県社協に社会福祉復興対策本部が設置され、現地事務所は各市社協等に引きつがれ、いまま復興活動に邁進している。

おでん、ぶた汁、ハンバーグ… 連日、「温ったかメニュー」が続々と避難所へ。

●「少しでも栄養をつけてもらわなければ…」と
下ごしらえに精を出す交野市協ボランティア
グループの皆さん。



現地での炊き出しを支える、各地の市町村 社協・ボランティアグループのネットワーク。

揚げたての天ぷらに、「温かくて
おいしそう」と、被災者の方々の笑
顔がこぼれる。2月16日、天ぷらと
野菜サラダ（600食分）、そして
ハンバーグが西宮市総合福祉センタ
ーで配られた。JR西宮駅にほど近
い同センターおよび同市立福祉会館
は約600人の人たちの避難所にな
っている。

この炊き出しは、交野市社協のボ
ランティアグループによるもので、
前日の15日には、野菜サラダの下準
備が交野市内で行われた。テキパキ
と野菜を洗ったり、ゆで卵を作った
り…。「現地では水が使えないので、
すぐに刻めばいい状態にしておこう
と思って。野菜が不足しているよう
なので、野菜サラダとフライにしよう
と決まったんです」とリーダーの福
永松栄さん。野菜や卵は同市社協の
費用で購入し、フライはニチレイが
無償で提供してくれたものだ。

交野市社協では、入浴サービス・
介護などの、15のボランティアグル
ープを組織している。ふだんは高齢

者やからだの不自由な人々のお世話
に携わっているが、震災後は市民か
ら寄せられた救援物資の仕分け・搬
送を続けてきた。今回の炊き出しボ
ランティアには、20人の予定に対し、
80人以上の応募があったという。
「食事の下準備という目立たない
仕事ですが、こんなボランティアが
たくさんあってこそ、被災地での救



●現地での調理は手際よく進められていく。

援活動も生きてくるのでは…」。普
段はからだの不自由な方たちの外出
介助のお世話をしているという栗原
清美子さんは語る。このように、現
地に足を運ばなくても、縁の下で、
自分の条件に合った形で被災地支援
のボランティアに携わった人が大勢
いる。

そして、明るく日の16日、福祉セ
ンターでは手際よく料理された食べ
物が次々と被災者の皆さんに手渡さ
れていく。「冷たいおにぎりより、
やはり温かい食べ物がいいですね」



●当日は朝早くから車で現地へ。全員がそれぞれの役割をテキパキとこなしていく。

西宮現地事務所がコーディネートした

2月12日から1週間の炊き出しメニュー

12日(日) ●枚方市社協/肉だんご入り野菜スープ700食 ●能勢町社協/かやくごはん500食 ●阪南市社協/うどん・サラダ500食 ●八尾市社協/ぶた汁・ごはん400食 ●大阪狭山市社協/ごはん・とん汁・シャケ・みそ汁80食 ●スエヒロ/ステーキ2000食 ●寝屋川市社協/おでん・おにぎり400食、うどん600食 ●寝屋川市地区BBS/とん汁・かす汁・ごはん100食

13日(月) ●守口市社協/ぜんざい500食 ●岬町社協/ちらし寿司500食 ●池田市社協/焼きそば・みそ汁50食 ●摂津市社協/野菜サラダ245食 ●大阪府生活改善グループ/カレーライス150食

14日(火) ●河内長野市/きつねうどん600食 ●岬町社協/炊きこみごはん・みそ汁100食 ●池田市社協/雑炊50食 ●千早赤阪村社協/とん汁500食 ●和泉市農業後継者の会/ぜんざい400食 ●羽曳野市民協/野菜サラダ500食 ●八尾市社協/きつねうどん400食 ●大阪府生活改善グループ/カレーライス500食

15日(水) ●大阪狭山市社協/野菜スープ480食 ●嵐山料飲組合/うどん1000食 ●岸和田市社協/うどん650食 ●門真市社協/ぶた汁150食 ●安土町社協/ぶた汁・ごはん50食 ●美原町社協/カレーライス650食 ●大阪府生活改善グループ/カレーライス500食 ●岐阜県社協/ぶた汁1000食

16日(木) ●交野市社協/天ぷら・野菜サラダ500食 ●藤井寺市中華料理オリンピック/ヤキメシ・スープ100食 ●八尾市社協/炊きこみごはん・すまし汁400食 ●大阪府生活改善グループ/カレーライス500食

17日(金) ●東大阪市自治協/やきそば600食 ●太子町社協/とん汁650食 ●柏原市社協/炊きこみごはん・みそ汁500食 ●松原市社協/炊きこみごはん・みそ汁・コーヒースタフ100食 ●三重県社協/ぶた汁1000食

18日(土) ●富田林市社協/おでん600食 ●東大阪市社協/やきそば400食 ●岐阜県上石津町/ケンチン汁等30食 ●東大阪市ボランティア連絡会/ぶた汁150食 ●岐阜県上石津町/ケンチン汁等400食、甘酒500食、混ぜごはん400食、煮込みうどん500食 ●八尾市社協/ぶた汁・ごはん400食 ●滋賀県安曇川町/みそ汁・おでん570食

とトレーを持って並ぶ人たちから笑顔がこぼれる。
また同センターでは、前日の15日にはカレーがふるまわれた。これは大阪府下の農家の主婦の集まりである「大阪府生活改善グループ連絡協議会」のボランティアによる炊き出しだ。被災者の方々はアツアツのカレーライスに舌鼓。子供たちにも大好評だった。
この支援活動は「カレーキャラバン」と名づけられ、府下の団体や企業の協力を得て、西宮市内の避難所17か所に10回にわたり延べ5000食を提供。この日は5000食のカレーとご飯を河南町農産加工センターの皆さんが朝7時から作り、貝塚市の生活改善グループのメンバー10人が、現地で夕食に配ったものだ。参加したあるボランティアは、「親戚が被災したので、とても人ごとだと



●延べ5000食の炊き出しを行った「カレーキャラバン」。

は思えません。少しでも暖かいものを食べて元気になつてもらえれば」と話す。
ぶた汁、うどん、おでん…。各市町村社協が組織しているボランティアグループを中心とした炊き出しは、震災直後から3月中旬までで約10万食にのぼる。



PTAの発案に 高槻のボランティアグループが協力。

3月4日、東灘区の「青い鳥幼稚園」では、久しぶりに園児たちの元気な声がこだました。この日は卒園式を控えた雛祭りの会。ここに高槻市から人形劇団が訪れ、併せてちらしずしが園児たちに配られた。

訪れたのは、高槻市社協の職員3人と高槻市ボランティア連絡協議会に属する11人のボランティア、計14人の皆さん。人形劇団『赤ずきん』の7人、腹話術の吉



●PTAのお母さん方も配膳に協力。

田一美さん、そして炊き出しをかつて出た3人の皆さんはそれぞれ、普段から活発なボランティア活動に取り組んでいる人たちだ。この方々を高槻市社協がコーディネートし、それに園のPTAのお母さん方の協力で、この日の催しが実現した。

PTA代表の山村美砂緒さんが語る。「悲しいことですが、この園でも4人の子供が亡くなりました。そこでやっと落ち着いてきたいま、卒園までに何か子供たちに楽しい思い出をつくってやりたいと考えたのです。しかしガスも水道もないので、簡単な食事の準備もままならない。そこで大阪府社協内の対策本部に相談したら、高槻から皆さんが駆けつけてくださったんです」。

『赤ずきん』は主婦を中心とした



●人形劇団『赤ずきん』の皆さんは高槻市ボランティア連絡協議会に属し、普段から活発な公演活動を展開している。





人形劇団だが、被災地を訪れるのはこの日が初めて。得意の「赤ずきん」と「アンパンマン」を上演したが、それぞれクライマックスでは子供たちから大喚声があがる。「園児たちの真剣なまなざしを見ると、逆に私たちが励まされます」とリーダーの佐藤昌子さん。

また炊き出しを担当した矢形律子さん（高槻市ボランティア連絡協議会会長）らも「普段から地域のお年

寄りに食事サービスをしているので炊き出しは慣れていますが、子供たちやお母さん方に、こんなに喜んでいただけて」と語る。

またこの日は、ぼんち（株）から250個の雛あられも届けられ、園児たちの楽しい思い出をバックアップ。PTAの発案に、個人が、企業が、そして福祉機関が協力して、子供たちに楽しいひとときをプレゼントした。



●高槻市ボランティア連絡協議会の矢形律子さん、角地敏彦さん、西田儀一さん。「先週は西宮の甲東小学校でランチの炊き出しをしました」と西田さん（写真右）。

洗濯物の中に「ありがとう」と手紙が…。

ガス・水道の復旧が遅れるなか、被災者の皆さんは入浴はもろろんのこと、洗濯もままならない。そこで対策本部の発案で始まったのが「洗濯サービス」。これは洗濯物を被災地から大阪に運び、それをきれいに洗濯して2日後にまた届けるというサービスだ。洗濯をする人、それをたたむ人、そして車で運ぶ人…それぞれが役割を分担し、チームワークを発揮し頑張っている。



●洗い終わった洗濯物を避難所へ届ける武田いつ紀さんたち。

運搬サービス（運転ボランティア）を担当するのは、大阪市立大、桃山大、同志社大、立命館大など、関西の7大学の福祉系学部・学科の学生たちが震災を機に結成したグループで、この日は桃山学院大学3回生の井川満裕君と武田いつ紀さんの2人が、車で西宮市総合福祉センターにやってきた。「ここには一日に一回、奇数日にきて、きれいに洗濯したものを係の人に渡し、集めていただいた汚れ物を持って帰るんです。こうしたサービスは2月の初めからやっていますが、試験も終わったことだし、これからはバリバリやりますよ」と井川君。聞けば柔道部のキャプテンとかで、「体には自信があるんです」と語る笑顔が頼もしい。そして武田さんは、こう語る。「洗濯物のなかに、手紙が入っていたんです。見れば、達筆の草書体で“本当にあ



●到着した救援物資はすぐさまリレーで仮倉庫（センターのプール）へ。そして順次仕分けされ、被災者に配られていく。

りがとう」と書かれてあった。そりゃあ、すごく嬉しくなるし、励みになりますね。洗濯は箕面市の特別養護老人ホーム「あかつき荘」で行われ、箕面市ボランティアセンターの主婦グループが、乾いた洗濯物をきれいにたたんでいる。また西宮市総合福祉センターには全国の社協から続々と救援物資が運ばれてくる。それらをさばっていくのも全国の社協から集まった人たちとボランティアたちだ。



●2月16日、茨城県土浦市から車椅子を含め、食料や衣類がトラックに満載して届けられた。

被災者からの電話相談に応じて、個別にボランティアを派遣。



●後片付けや引越しボランティアにヘルメットは欠かせない。



水くみ、家財道具の後片付け、おむつの配達…

被災者の生活に少しでも役立つきめ細かな支援活動をめざして。

西宮現地事務所ではさまざまなボランティアコーディネートを行っているが、被災者からの電話相談に応じて個別にボランティアを派遣するのも活動メニューの一つ。2月23日、西宮市内のKさんから、「ピアノなどの家財道具を動かしてほしい」という電話相談を受け、6人のボランティアがKさん宅を訪問することになった。地図を片手に自転車に乗って事務所を出発。町のあちこちで家屋の取り壊しや後片付けが行われている。道路はアスファルトなどが一部、盛り上がった破損しているため、それを避けながら15分ほどでKさん宅に到着。さっそく、ピアノを掛け声をかけながら全員で持ち上げて移動したり、タンスを外へ運び出したり…「グランドピアノが動くなんて…、本当に凄まじい地震でした。大半の倒れた家財道具は片づけたのですが、ピアノだけは重くて家族ではどうしても動かせなかったの

で、本当に助かりました」とKさん。6人のボランティアの一人、三宅敏昭さんは京都からやってきた大学3年生。もう一か月近く、毎日、京都から約2時間かけて、ボランティアに通っている。

そして6人の最年長、61歳の山下リクヲさんは岐阜県からやってきたボランティアだ。2週間ほど泊まり込んで活動したあと、再び2泊3日の予定で参加したという。最初は避難所での水汲みやトイレの消毒液、タオル交換などを担当していた。

「ホースで水をポリタンクなどに入れる、ちょっとした合間に身内が亡くなった様子や命からがら逃げ出した話をされるんです。皆さん、自分の悲しみを誰かに訴えないと苦しくておれないという様子に、胸が詰まりました」と話す。2度目の今回は、顔見知りになった被災者のことが気になって、よく避難所に足を運ぶという。「最初より、少しは落ち着かれたようですが、先の見えない生活に苛立っている方も多く、まだまだ私たちボランティアのすべきことはたくさんある」と、感じたそう。



●100人の被災者がいれば100のニーズがある。現地事務所では電話相談でそれらにきめ細かく対応。

また、寝たきりの病人を抱えるYさんから、こんな電話相談があった。「主人のオムツとオムツカバーがなくなつたが、介護が大変で避難所まで取りにいけない。何とか届けてくれないか」と。そこで、榎田俊幸さん(29歳)、恩田昌彦さん(27歳)、大学生の向井崇さん(20歳)の3人のボランティアが、Yさん宅まで自転車でオムツ類を積んで届けることに。3人とも東京から来ているため、西宮の地理がわからないので、地図で確かめながら約20分かけてYさん宅に到着。大喜びで迎えられ、ご主人とも握手をして帰ってきた。「喜んでもらえて、こちらまでうれしくなった」と恩田さんは語る。

3人とも、ボランティア活動に参加するのは、今回が初めて。異口同音に「何ができるかわからないが、何とかしなければ」と、ごく自然に参加を思い立ったという。有給休



●被災者宅へおむつなどを届ける。(右から) 向井さん、榎田さん、恩田さん。



●左から実樹久子さん、福田正雄さん、松木泰子さん、八尾市社協のスタッフ。

障害者や高齢者からの入浴サービスの要請に、各地の社協から移動入浴車が出動。この日は八尾市から、普段より入浴ボランティアを行っている皆さんが在宅入浴サービスカーで被災地に駆けつけた。実樹さん、福田さんは民生委員で、松木さんは元大阪日赤病院・脳外科部長というキャリアの持ち主。「入浴介護はけっこう難しいのですが、松木さんがいらっしやるので大助かり」と実樹さん。それぞれの経験を活かして多くの人ががんばっている。

●入浴サービス車も出動

暇を取ったり、春休みを利用してやってきた。これまでに物資の仕分け、炊き出しの手伝いなどをし、榎田さんと恩田さんは1週間、向井さんは3週間ほど、泊まり込んで活動を続ける。

榎田さんは、「ボランティアは受け身ではだめ。自分から行動しないと何にもならない」ということを学んだという。また、臨床心理学を学ぶ向井さんは、「炊き出しや物資の運搬といった体力が必要な活動だけでなく、心のケアなど専門的なボランティアの必要性を痛感した」と語る。このように、全国から集まった人たちが何かをし、確実に「大切な何か」を持って帰っていく。

●2月17日には、東大阪市自治協婦人部、日赤婦人部の皆さん62名が、焼きそば10000食分の炊き出しと清掃ボランティアを行った。



最前線で 救援活動をコーディネートする 西宮現地事務所。



●毎晩8時から行われている西宮現地事務所のミーティング。問題点を話し合い明日の活動に備える。



●明日の救援活動について、指示を出す
府社協の佐藤貞良・地域福祉課長

避難所のお世話、物資の仕分け…、
泊まり込みで救援活動にあたる。

さて、紹介してきたような多彩なボランティア活動を現地でコーディネートしているのが、西宮市津門川町の市立福祉会館4階にある西宮現地事務所。地震直後に府社協が開設し、その後は社会福祉関係者救済合同対策本部の前線基地の一つとして、他の現地事務所同様さまざまな任務にあたっている。ここへは、全国の社協から職員が1週間交替で続々と支援活動に参加。常時30人近い職員とそれを上回るボランティア

が泊まり込みで、避難所のお世話や炊き出しの他に、救援物資の搬入・仕分け、被災者からのさまざまな相談を受け付け対応する電話相談、また他の施設や銭湯まで、入浴したい人を車で運ぶ入浴サービスなどを行っている。

ある1日を紹介すると…。

〔午前〕…6時に起床、朝食の炊き出し準備・配食、簡易トイレ・手洗い水の交換、相談受付（この日は後片付けなど37件の依頼）。

〔午後〕…昼食配食、炊き出し準備、ゴミ処理・飲料水の補充、物資の仕分け・搬出（この日は介護用品を2地区へ）、訪問活動。

〔夕方・夜〕…夕食炊き出し準備、相談ケア、営業店や道路状況などの情報収集と整理、ボランティアリーダー・コーディネーターの会議・役割調整。

…と文字通り早朝から深夜までフル回転である。

長期のボランティアもスタッフと共にここで寝泊まりし、毎晩のミーティングに参加しているが「どうすることが被災者のためになるのか」をめぐる活発なディスカッションが連日続けられていく。また「ボランティアとのコンビネーション、被災者の皆さんとの信頼関係の維持など、苦労はたくさんあります。でも、ここでの経験で、支援活動の「しんどさ」のなかの充実感」が分かってきたような気がします」とある社協の若いスタッフ。しんどさのなかの充実感…それはまた、大勢のボランティアが体感していることでもある。



●ボランティアのために100台ほど用意された自転車も昼間はフル稼働。

西宮現地事務所で活動する 全国の社協職員

●滋賀県、和歌山県、三重県、愛知県、福井県、富山県、石川県、岐阜県、新潟県、静岡県、長野県、栃木県、群馬県、茨城県、名古屋、北海道、東京都、千葉県、宮城県、奈良県、兵庫県、大阪府



●(左から) 田島操さん、辻美知子さん、田中幹世さん。



●東京からやってきた奈良有祐さん(右)。

テレビが報じる惨状にショックを受け、何とかしなければ…と全国からボランティアが。

西宮現地事務所の開設直後より、全国各地から続々とボランティアが集まってきた。大阪はもちろんのこと、首都圏、さらに北海道や沖縄からも。なかには寝袋を担いで、飛び込みでやってくる学生もいる。登録・活動する人はすべて、府社協が大阪府の補助を受けボランティア保険に加入するシステムになっているが、西宮現地事務所がコーディネートするボランティアだけでも、連日約200人にのぼり、泊まり込みで活動している人も少なくない。

その中の一人、奈良有祐さんは東京からやってきた大学4年生。現地に泊まり込んで、もう2週間になるボランティアの受け付けや作業の割り当てなどを担当している。

「震災の様子をテレビで見ているのを受けました。東京で毎日、当たり前の生活が続けている自分が許せない気がして、とにかく何かの役に立ちたいと飛んできた」と語る。

毎朝6時に起床。事務所の掃除をすることから1日が始まり、事務所の床に寝袋にくるまって寝る毎日だ。奈良さんのように泊まり込んで長期にわたって活動をしている人は常時20人近くいる。炊き出し担当の人たちは朝4時には起きて準備を行う日々が続いている。

「ここでの活動が終わっても、一

生続くだろう強い絆で結ばれた人間関係ができたことが何よりです。さまざまな経験をしてきた人と接することで、自分自身本当に得るものがある。ボランティアを『している』というより『やらせてもらっている』という気持ちなんです」と話す。

大阪市立大学人間科学部福祉学科の大学生田中幹世さん、辻美知子さん、田島操さんの3人は事務作業を担当している。西宮市内で営業している店舗を調べて業種ごとに地図にするしを付いたり、市役所からの情報を収集したり…。社協職員の指示に従ってさまざまな作業をする。大学卒業後はそれぞれ福祉の仕事に就くことをめざしているだけに、時間の許す限りボランティアを続けたいと話す。



●日帰り・長期、男性・女性…ボランティアそれぞれに適した仕事を割り振っていく。

●趣味の無線を活かし、連絡体制の強化に一役

さまざまな場所でボランティアたちが活動をしているため、当初は相互に連絡を取り合うのが大変だった。しかし尾崎市にある「FIZ-FM愛好会」のメンバーが無線ボランティアとして参加してくれたことで、スムーズに連絡が取れるようになった。100人ほどのメンバーが順番に事務所に詰めているが、その中の一人、満園聡さんは無線を始めて5年になるという。「いまでも趣味でしてきたことが、こんなときに役立つって本当にうれしい」と話す。



前線をバックアップする、府社協内の 社会福祉関係者救援合同対策本部。

全国の社協と連携し、救援活動の情報を
集約し、現地の状況に合わせて調整。



さて、紹介した西宮現地事務所などを統括するのが、1月23日、大阪府社会福祉協議会（府社協）内に設置された社会福祉関係者救援合同対策本部（以下、本部と略）である。本部では開設以来、救援活動を円滑にすすめるため、さまざまな活動を行ってきた。

まず、西宮と芦屋の2つの現地事務所の活動をバックアップ。常に緊密な連携を保ちながら、被災者の方々のさまざまなニーズを満たすために、大阪府下の市町村社協をはじめ全国の社協と連絡を取り、必要な物資を集めたり、炊き出しなどを用意。物資の内容も当初は水や粉ミルクといったものであったが、日が経つにつれて多岐にわたってきた。また炊き出しも、同じメニューが重ならないように調整したり、避難所の被災者の数に合うように、何力所かに分散して届けるなどの調整を行ってきた。

炊き出しは大阪府下の市町村社協を通じて申し出が圧倒的に多かった

が、島根県や岐阜県といった遠方からの支援も。物資は北海道、東京、長野など全国から申し出があり、それぞれ長時間かけて続々と本部や現地に運ばれた。その他、義援金の受け付けを行ったり、ホームステイ、里親、家屋提供の申し出の情報を兵庫県へ提供した。

同時に、本部では全国から問い合わせしてくるボランティアの受入れや現地への紹介といった、ボランティアセンターの役割も担った。各市町村社協のボランティアセンターで登録を受け付けた応募者情報を集約するとともに、直接、本部でも登録を受け付け、これらを現地のニーズに応じて調整、必要に応じて派遣を要請した。本部の電話は朝早くから一日中鳴りっぱなしという状況が続いたが、ボランティアは初めてという人も多く、あらためて今回の震災の被害の大きさに心を痛めた人が、いかに多かったかというのを痛感させられる。「何かしたい、役に立ちたい」という素朴な気持ちで、これだけのボランティアへの広がりをみせたのであろう。「明日からでもすぐに行きたい」という声も多数あり、多い日には200人以上を受け付け

兵庫県南丹波市
救援物資



●対策本部に全国から届けられた救援物資。



●全国から集まるボランティア活動の申込を受ける府社協ボランティアセンターの青木美知子コーディネーター。

たほどだ。

これらの救援活動とともに、本部では、「救援ニュース」を、地震発生から4日後の1月21日から毎日発行。全国55か所の社協にファックスで同時送信し、これにより即座に被災地での活動状況が各地で把握できるようにになったのである。その結果、物資、炊き出しなどでのミスマッチをできるだけ防ぎ、効果的な救援活動に威力を発揮した。なお、こうした役割を果たした救援合同対策本部および現地事務所は、3月15日をもって一応活動を終了した。

緊急時に威力を発揮した ネットワーク。

ボランティアと

「校区福祉委員会」の連携プレイ。



●もとも豊中市社協に登録していたボランティアだったが、「今までは人に説明を受けて行動していた。けれど今度は自分が説明する番。いろんな個性を持つ人をお願いすることになって、人の気持ちをくみとれるようになりました」と女子大生たち。

大阪府内の全半壊世帯の8割を占める被害を出した豊中市。ここでも多くのボランティアが豊中市社協内に設けられた震災支援ボランティアセンターに結集し、さまざまな支援活動に取り組んだ。豊中市社協では普段から約500人のボランティアが組織され、障害者・高齢者などへの在宅支援などを行っていたが、1月27日には豊中市の協力のもとに、豊中市社協震災支援ボランティアセンターを開設。この拠点に遠くは関東から駆けつけた人も含め、多くのボランティアが救援物資の仕分け・搬送、食事配送、避難所の手伝い、障害者（児）・高齢者の介助、街頭募金活動など、さまざまな救援活動に携わっている。

豊中市の場合ぜひ触れなければならぬのが、市社協を中心に従来から「校区福祉委員会」の活動を進めていたという点だ。おおむね小学校単位で自治会、婦人会、民生委員協議会、保護司会など地域諸団体の協力を得て地域の福祉活動を展開してきた組織だが、これが今回の災害支



●全国から送られた救援物資を仕分けするボランティア。

援では大きな機能を発揮したという。たとえば、震災直後、著しく被害を受けた校区では関係団体と共に、一人暮らしの高齢者宅を調査し、安否確認や避難所での支援・炊き出し、家財整理等を行った。また、「〇〇さんの家に行ったが誰もいない。安否は？」との問い合わせが震災支援ボランティアセンターに入っただとする。センターではすぐに校区福祉委員会に連絡し、安否の確認がきわめて迅速に行えたということだ。「災害の規模もあったでしょうが、こうしたネットワークが緊急時に思わぬ力を発揮しました」とセンターのスタッフたち。

日頃の活動が役立ったという点では、豊中市社協に登録し活動を展開していた約500人のボランティアたちの貢献も見逃せない。普段からの障害者・高齢者などへの福祉活動の中で培ったノウハウを大いに発揮し、震災支援のために登録されたボランティアと連携して、きめ細かな支援活動を展開した。

そしてもう一つ見逃せないのが、登録システムのメリットが十分に生かされた点だ。ボランティア登録票には資格を書く欄があり、だれが運転免許、保母、教員、看護婦、カウンセラーなどの有資格者をセンターが掌握。これも現場でのミスマッチを防ぐのに大いに役立ったという。二月末の時点で、市内外の個人登録ボランティアの数は約1700人、それに多くの企業ボランティア及び団体・グループ、さらに従来からの500人が加わった組織が、これからも豊中の町を支えていく。

豊中市社協
ボランティア
センター



●情緒不安定になった子どもたちの、心のケアも大切。ボランティアセンターでは保母資格を持つボランティアを派遣し、豊中市立保健センターに子供たちとのプレイルーム（遊び場）をつくった。「自分の資格がこんな時に役立って幸せ。子どもたちの笑顔が何よりうれしい」と参加したボランティア保母さん。

「ができるか」



●体育館に山積みされた救援物資を整理し、リレー作業でトラックに積み込む。

連日、数10人が物資の仕分け、避難所でのお世話に活躍。



今回の震災では、多くの企業も製品の供給、施設の提供など、さまざまな支援活動を展開した。ボランティア部隊を組織して現地に派遣した会社もあり、松下電器産業も多彩な支援活動を行った企業の一つだ。

同社では別表のように、震災直後から義援金をはじめ、さまざまな製品の無償提供を行ってきたが、その後は労使の話し合いでボランティア部隊を組織し、いらい、毎日数10人が現地で活動が続いている。

1月26日～2月5日までは、全国からの救援物資が日々大量に送られてくる神戸外国語大学(神戸市西区)で、物資の整理作業に多くの社員が従事した。そこが一段落すると、今

松下電器



●魚崎小学校で炊き出しの準備。

度は東灘区の魚崎小学校、福池小学校へ転進。ここでは炊き出しや片付け、物資の仕分けなど避難所運営を手伝った。こうしたボランティア希望者は今なおかなりの数に上るといえるが「しかし本業を軌道に乗せることも大きな社会的責任。ですから例えば、緊急に必要な製品を作っている事業場の人などには本業で頑張ってもらうのも重要。企業は、本業での貢献と経営資源を活用した支援との、両面を考えなければ」と社会文化部の石井純副参事。

現在も、同社のボランティアは毎日20～50人が現地で活躍を続けているが「救援物資の送り状に書かれている被災者への励ましのメッセージや、高齢者のボランティアの頑張りを見ると不思議な力が湧いてきまし

●阪神大震災に対する松下電器の支援状況

2月24日現在

- 【物】乾電池23万個、懐中電灯5万本、ラジオ1万台、暖房器具2千台、無線機2百台、洗濯機2百台など。
- 【金】義援金3億円(松下電器グループ12社と松下電器)、救援カンパ1億1千万円(2月16日現在、海外事業場ほか2千万円)。
- 【人】ボランティア活動センターを労使で開設(組合が20～50名/日募集。会社が出勤扱い、ボランティア保険負担)。
- 【施設】現地で活動するボランティア団体に事務所提供を申し出。(神戸ナショナルビルの一部屋を活動の前線拠点として)



●避難されたお年寄りに、とん汁を届け、お話を聞くのもボランティア。

V 企業も労組も 「自分たちに何 を考えた。」



チャリティー・きやらばんで
被災地の子どもたちを激励。

日産労連

日産労連が費用を負担し、曹洞宗ボランティア会の協力で、おはなしキヤラバン「つばさ」による人形劇『三びきのやぎとトリル』を上演したものだ。

「被災地の子どもたちは、地震の恐怖、さまざまな悲しみや不安を胸に毎日を過ごしている。そんな子どもたちに少しでも笑顔を取り戻してほしい」と、日産労連の坂本久典さんは、上演のきっかけを語る。

大開小学校では授業の一環として、この人形劇が催され、500人余りの児童と先生が観劇。劇の前にはじゃんけんゲームも行われた。

「最初は子どもたちからの反応が少なかったが、後半はだいぶ盛り上がりました。たくさんさんの笑顔に出会えてよかった」と、おはなしキヤラバン「つばさ」の立花由美子さん。被災地での上演とあって、移動しやすいように舞台装置や音響設備も最小限に止めたというが、午後から回った、避難所になっている長田区の兵庫高校でも大好評だった。

「日産労連は20年前より、23万の組合員が毎月100円ずつカンパをし、労働組合としてさまざまな福祉活動に取り組んできました。組合員の数が多いのでカンパの額だけで年間2億7000万円。この基金を有効に使い、今後さまざまな活動を



●手早く後片付けをして、次の上演場所である兵庫高校へ移動。

展開していきたい」と、大阪地方協議会議長の湯口安彦さんは語る。企業も労働組合も、それぞれのカタチでがんばっている。

やりたいときに、できることを。 多くの人の“自発性”を開花させた

「応援する市民の会」



●ボランティアの発案で作られるようになった応援新聞。誰でも手を上げればその時から編集委員だ。

初めての人も
数分後には重要な戦力。

壁に貼られた紙の上の手書き文字を追う真剣な目。その後ろからもうくつものまなざし。背中にリュック、防寒ジャケットにジーンズ。男もいれば女もいる。若い世代が多いが、おじさん、おばさんも混じる。紙の上には「荷物整理」「引越し手伝い」「水汲み」「炊き出し手伝い」「子どもの遊び相手」等々の「本日の活動内容」。若い男性は「OK、今日はこれをやるぜ!」とばかり、ペタリと「引越し手伝い」の紙の



●小さな避難所にもニーズがいっぱい。建物が壊れていなくても、水汲みや炊事の手伝いが必要な場合も。

上に、自分の名前を書いたポストイット(付箋)を貼った。カップルで来た二人も「炊き出し」の上に名前を仲良く貼る。これで、彼らの今日の活動は決定だ。あとはそれぞれの活動で人数がそろえば、スタッフから仕事の説明と注意点を聞き、コピーの地図をもらって出発。同じようなことが次から次に繰り返されていく。

ここは阪神電車深江駅にほど近い「阪神大震災・被災地の人々を応援する市民の会」(大阪ボランティア協会、大阪YMCA、地域調査計画研究所、日本青年奉仕協会が幹事団体となって震災後つくられた)の東

灘出張所。「何かしたい」と駆けつけたボランティア志願者が実際の活動を見つける出会いの場だ。初めてのボランティアは受け付けの前に、会の活動主旨を書いたプリントや活動参加マニュアルが渡され、オリエンテーションを受ける。そして受付でカードに所定事項を記入して、リピーターたちと同じように「本日の活動内容」を見て仕事を決める。初めての人も数分後には重要な戦力として出発。停滞はなく、どんどん人が入り、人が出ていく。

しかしこのスムーズな流れも、実は初めからあったものではなかった。「応援する市民の会」は、阪急西宮北口駅近くに事務所を開設し、1月21日から登録制による市民参加のボランティア活動を開始。初日こそ60名の参加だったが、2日目の22日は一挙に280人が駆けつけ、受け付けはパニックになった。翌日からは登録制を廃止し、現在のポストイットに名前を書く簡易受付システムに変更。「これが成功しました」と大阪ボランティア協会の事務局次長であり、「応援する市民の会」東灘出張所の所長を務める名賀亨さん。「当初はとくに、刻々と被災地のニーズそのものが変わっていた。

●活動内容を見て、やりたいメニューに自分の名前を貼っていくポストイット制。不特定多数のボランティアをコーディネートする方法として大きな効果を発揮したという。



●「焼きそばの炊き出しをしたいんだけど手配してくれる人がほしい」：応援する市民の会では、そんなリクエストにも対応。



登録してもらって待機して：というやり方ではとてもニーズに対応できなかったでしょう」と拠点開設直後を振り返る。2月末までに「応援する市民の会」に参加したボランティアの数は、各拠点をトータルして約1万3千人。多い日で600人以上、平均約330人もの数を少ないスタッフで対応できたのは、このシンプ

「困っている人はいませんか」とチラシを配る「訪問お手伝い隊」。

ルなシステムだった。「本日の活動内容」の紙の上に貼られた名前を見るだけで、誰がどこで、その日何をするかが分かる。参加者数の統計も簡単だ。登録制でノートにデータをいちいち書いて取りしきろうとしていたら、結局は事務管理に忙殺されて、目的の活動がうまく動いていたかどうか…。

ユニークな運営はユニークな活動を生んだ。例えば「訪問お手伝い隊」。

事務所には、被災して避難所や自宅にいる人たちから日々、応援の依頼が入ってくる。それらの要請に応えるのはもちろんだが、ボランティアのニーズは、実は情報が入ってこない所にもある。具体的な依頼は寄せられていなくとも、これだけの規模の災害では、必要とされる活動がまだまだであると予想された。その必要とされる活動を、避難所や地域をまわりながら発見して活動を行うのがこの隊の仕事。いわば「指示待ち」ではなく自主的に課題を探そうというボランティア隊だ。

「自分がやるべきことは何か、自分自身で判断して行えることが大切。ボランティア自身の自立が今回試された」と名賀さん。あらかじめプログラムされたボランティア体験でなく、各自が現場に飛び込んで自らが羅針盤になる。まさに自発性・そしてアイデアが試されるというわ

けである。

その一つの成果が、「営業しているお店の情報」や「お風呂マップ」だ。地域の情報を冊子にまとめて被災者に配って喜ばれたが、これも現場をまわっていたボランティア自身の発案だったという。とくに「お店



●全壊したお寺の解体作業をするボランティア。



●スタッフから仕事の説明を聞いて、いざ出発。

情報」は、発案から調査、編集・印刷までたった一日で出来上がった。一人のボランティアが現場の声を聞いて歩いていくうち「こんなにつくったらええんとちゃうか」と思った。それを聞いた他のボランティアたちが「やろう、やろう」と言い出した。そして現場を手分けして情報を集め、編集もみんなで行った。一般の常識からすれば奇跡に近い短期決着。これを可能にしたのも、個々のボランティアの自発性を大切にする柔軟な運営方針だ。

「公平の原則」から自由ではいられなかった行政に対し、そのことにしばられず、多彩な自発性とアイデアを発揮したさまざまな市民グループたち。もちろん「応援する市民の会」もそんなグループの一つだが「基本的に、行政は鳥瞰図を見て動く。それに対してわれわれは虫瞰図を見て動く」という名賀さんの言葉が印象的だ。

平成6年度

ボランティアコーディネーター・リーダー研修

ボランティア活動の多様性を学び、
今後の活動に役立てる。



ボランティア活動がかつてなく盛んになり、その関心と理解も高まっています。今日のボランティア活動の多様性と先駆的・開発的な活動を学び、各市町村社協に設けられたボランティアセンターの今後のあり方や、ボランティア活動発展の課題を明らかにするための研修会を実施しました。また、最終日の3月2日には分科会に分れて活動発表と交流会が行われました。

日時 2月7日(火)、13日(月)、
24日(金)、3月2日(木)の4日
間。いずれも午前10時～午後
3時。

2月7日(火)	●障害者スポーツの現状と課題 大阪府身体障害者福祉協会次長 身体障害者スポーツ指導員 久保添晋明氏 ●移送サービスとボランティア活動 京都運輸ボランティア友の会会長 小寺四郎氏
2月13日(月)	●福祉のまちづくりと障害者の自立 大阪府立大学教授 定藤弘氏 ●大阪府における新しい施策とボランティア育成について 大阪府福祉部福祉政策課主幹 内屋 幸治氏
2月24日(金)	●福祉施設でのボランティア活動プログラムの開発 大阪府立特別養護老人ホーム美原荘 指導員 行松 英明氏 ●企業の社会貢献とボランティア活動の展開 三菱電機株式会社参与兼営業本部長代理 渡邊 一雄氏
3月2日(木)	●生活援助型食事サービスとボランティア活動 京都原谷こびしの里デイサービスセンター 市田 実氏

参加者 ボランティアコーディネーター、ボランティアグループリーダーおよびボランティア担当職員など200人

自助具製作ボランティア育成講座

障害者や高齢者の自立を促す自助具を手づくり。



「自助具製作ボランティア育成講座」を実施。原則として毎月第4日曜日(1コース2日間)に講義と実習が行われ、自分で飲み物を飲めるようにするための、ストローホルダーやコップホルダー、髪をとくための補助具のついたブラシなどを製作。指導にあたった、「自助具の部屋」の中島博さんは、「自助具は障害者や高齢者の自立を促すため、いま、残っている手の機能を活用できるように工夫することが必要。一人ひとり障害の程度が違うので、それを見きわめた道具を作ることが大切です」と、受講者に語っていました。



真剣な表情でストローホルダーを作る参加者。



分科会に分れて討論。

ボランティア活動のひろがりと思いを考える。



講演のあと8つの分科会で討論。

演の後は、テーマ別に分科会を行い熱心な討論が繰り広げられました。

講演1

「共に生きる町づくり」

全国精神障害者団体連合会

代表 小坂 功氏

講演2

「ここを病むということとは？」

稲垣診療所（岸和田市）

●まとめ
所長 稲垣俊雄氏

「ボランティア活動のひろがりと思いを深まり」

大阪ボランティア協会

常務理事 巡 静一氏

日時 2月10日（金） 午前10時～午後4時30分

会場 大阪社会福祉指導センター

参加対象 精神保健ボランティア活動に関心のある方

主催 大阪府社会福祉協議会

大阪ボランティア協会

後援 大阪府 大阪精神保健協議会

平成6年度 朗読ボランティア研修会

会場に響きわたった朗読の声。



参加者は一所懸命に教材を朗読。

めに研修を行いました。俳優の柳川清氏が「朗読の実際と朗読の深み」と題して講演。講演の合間には朗読用の教材を参加者全員で読み上げて、柳川 清氏が、具体的な朗読のポイントについて、ていねいにアドバイス。会場は熱心に教材を読む参加者の声に包まれました。

日時 2月20日（月） 午後1時～3時30分

主催 大阪府社会福祉協議会・朗読ボランティア活動交流推進委員会

参加者 朗読・音訳ボランティア活動に関わっている人

編集後記

多くの人たちが「人生観を変えた」という今回の大震災。それほど、1月17日の出来事は被災者のみならず、日本の国全体に大きな衝撃を与えたものだった。そしてテレビ画面に映し出される惨状を見て、多くの人が「自分に何ができるか」を考えた。思えば、これだけの人たちが「自分に何ができるか」を考えた経験は、この国はじまって以来の出来事だったかもしれない。

震災直後に、北海道から、沖縄から、「何かをしたい」「何かはできる」と立ち上がったボランティアたち。それぞれのバックグラウンドは、もちろんさまざま。しかし共通しているのは、被災者の皆さんに連帯したい、共感したい……という熱い思いである。

ライフラインはほぼ復旧したが、復興はこれからが本番。「何かをしたい」「何かはできる」……今回の震災で芽生えたこの熱い思いが、今後さらに、日本の社会のさまざまな領域で大きく育まれることを願わずにおれない。

ボランティアおおさか・創刊号

1995年3月25日発行

企画・発行 社会福祉法人

大阪府社会福祉協議会

大阪府ボランティアセンター

私たちは、こころの病を持つ人々のことを理解しているでしょうか？病に対する偏見や差別、福祉施策の乏しさ……。心の病を持つ人々は、地域社会で生活する上で、また教育、職業を得る上で、さまざまなハンディキャップを負うことを余儀なくされています。

これらの問題を解決するために、当事者や家族をはじめ、医療、保健、福祉等の関係者がさまざまな取り組みをしています。大阪においても、地域に作業所が生まれ、最近では病院や保健所、作業所を拠点としてボランティア活動が活発化。そこで、ボランティア活動をしている方を中心に情報交換、学習、交流をする場として研究集会を実施しました。講

近年、朗読・音訳ボランティア活動が活発に展開され、各方面で多様な活動が取り組まれています。朗読・音訳の実際を交流し、朗読の魅力にふれ、活動の楽しさを高めるた

安心して活動に取り組むために

ボランティア総合補償制度

● ボランティア保険

ボランティアがボランティア活動中に、①偶然な事故によってケガをした場合の「傷害保険」、②第三者の身体や財物に損害を与えた場合の「賠償責任保険」、③ボランティア活動中に死亡し、「傷害保険」の給付対象にならない場合の「死亡見舞金」の3つの制度がセットされています。掛金はAプランが年間300円／1名、Bプランが500円／1名で、②の賠償責任保険では対人事事故1名あたり最高1億円、1事故に対し最高2億円(Bプラン)まで支給されます。

● 子供保険

地域で活動している子供を中心としたグループが主催する行事参加中に、参加者である子供が偶然な事故によってケガをした場合の「傷害保険」の制度です。対象は中学生以下となります。(宿泊をともなう行事は対象外ですから、次の活動行事保険Ⅱ型で加入してください)。掛金は年間200円／子供1名で、死亡事故の場合は500万円が支給されます。

● ボランティア活動行事保険

ボランティア行事参加中に、①参加者が偶然な事故によってケガをした場合の「傷害保険」と、②主催者または参加者が第三者(他の参加者も含みます)の身体や財物に損害を与えた場合の「賠償責任保険」の2つの制度がセットされています。賠償責任保険では対人事事故1名あたり最高1億円、1事故に対し最高2億円まで支給されます。掛金は「宿泊なし」のⅠ型が1行事30円／1名(1回の行事につき50名以上)で、「宿泊あり」のⅡ型は宿泊日数によりちがいます。1泊2日の場合は230円／1名です。

● 有償活動保険

ボランティア活動であっても、報酬等の実費弁償が毎年大阪府が決めている最低賃金を上回る活動で、かつ①活動が営利目的でないこと、②活動実施主体が営利団体でないこと、③関係官庁や市町村社協の指導・育成・監督を受けていること…の3つの条件を満たす活動を対象とするものです。掛金はAプランが年間1000円／1名、Bプランが1500円／1名で対人事事故1名あたり最高1億円、1事故に対し最高2億円(Bプラン)まで支給されます。

● 移送サービス交通傷害保険

ボランティア活動やデイサービス事業で、その利用者(受益者)が病院送迎等の移送サービス中の交通事故によりケガをした場合に補償される保険です。加入対象者はデイサービス事業などの利用で、掛金は利用者の方の「平均サービス利用日数」により異なり、420～2840円／1名です。補償金額は死亡が300万円。その他、付添看護保険金などもあります。

いずれの保険も、加入手続きは最寄りの市町村社会福祉協議会へ。
詳細は大阪府社会福祉協議会(電話06-762-9471)
までお問い合わせください。